

St. Luke's International University Repository

Attempt of Learning Patient Safety Education in Child Health Nursing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沢口, 恵, 西垣, 佳織, 小林, 今日子, Sawaguchi, Megumi, Nishigaki, Kaori, Kobayashi, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00013656

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



小児看護学における患者安全教育の取り組み

沢口 恵¹⁾ 西垣 佳織¹⁾ 小林 京子¹⁾

Attempt of Learning Patient Safety Education in Child Health Nursing

Megumi SAWAGUCHI¹⁾ Kaori NISHIGAKI¹⁾ Kyoko KOBAYASHI¹⁾

〔Abstract〕

【Purpose】Examine the attempt of learning patient safety education in children's safe medical treatment environment.

【Method】This was a one-group post-test. Third-year nursing students practiced patient safety education in May, and practiced again before the actual training. The patient safety education was to assess students' ability to predict accidents and to support children's safe medical treatment environment by DVD. The students practiced supporting children's safe medical treatment environment by training in the pediatric ward. After they had a discussion using the DVD, they completed a questionnaire available from the university network.

【Result】The learning of the student in May was to: ① predict an accident, and ② observations and point of view. Students forgot the content learned in May. The students learned by discussion before the training in the pediatric ward. The DVD and discussion was useful for students' implementation in the pediatric ward. Students' impressions were: ① necessity to have many scenarios, ② repetition to reinforce learning, ③ development of implementation in actual practice.

【Conclusion】Students recognized the importance and value of repetition of observation-judgment-practice in the healthcare setting. Feedback to the nursing staff preceptors and clinical instructors regarding the training is important.

〔Key words〕 children, patient safety education, nursing student

〔要旨〕

2016年度小児看護学演習において、写真を用いた患者安全教育を実施したが、実際の状況とはほど遠く、実践に結びつけるには限界があると考えた。そこで実践に向けた効果的な演習方法を検討するため、2017年度の学部3年生に対して、映像資料を用いた患者安全教育を実施し、実施後アンケート調査を実施した。小児看護学Ⅱ演習後の学びとしては、【発達段階に合わせて危険を予測すること】【多くの視点があることの気づき】があった。小児看護学実習への活用としては、実習に役立ったと答えた学生が多かった。学習全体の感想としては【様々な状況を想定した多くの場面設定の必要性】【実習初日での演習による安全な療養環境への支援の再確認】【演習方法の検討の必要性】があった。学生は小児看護学Ⅱ演習と小児看護学実習初日演習での学びにより、安全な療養環境への支援を意識して患者に関わることができ、患者への支援につなげていた。

〔キーワード〕 小児, 患者安全教育, 看護学生

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

I. はじめに

日本医療機能評価機構の医療事故情報収集等事業平成28年度年報¹⁾で、参加登録医療機関からの報告4,783件のうち小児科・小児外科の報告213件をみると、「療養上の世話」が96件と一番多く、次いで「ドレーン・チューブ」36件、「治療・処置」26件の事故が報告がされている。小児医療の場でおこる有害事象は医療現場で起こる事故に加えて、小児医療の特殊性や小児の発達的な特徴が複雑に影響しあうことによって起こることがある²⁾。小児は予測のつかない行動を起こし、安全に留意していても事故を起こす可能性が高い³⁾。小児看護を実践する看護師には発達段階を踏まえたうえで小児の行動を予測することとともに、療養環境での危険を予測し環境を整備する必要がある。そのような能力は、看護学生が小児看護を実践する際にも求められている。

2016年度小児看護学演習〔小児の安全シミュレーション(グループワーク)〕において、事故を起こす可能性が高いと思われる場面3つの写真資料を作成し、30分間のグループディスカッションを行った。学生の感想を分析した結果、安全な療養環境の支援に必要な能力の気づきや、小児の成長発達に合わせた看護実践への気づきがあり、小児の安全に対する知識を深めていた⁴⁾。しかし切り取られた1つの場面をみて、30分かけてディスカッションすることは実際の状況とはほど遠く、実践に結びつけるには限界があると考えた。

そこで2017年度学部3年生に対して、小児の療養環境への支援を臨地実習での実践に結び付けるために、前期の講義と演習、後期の小児看護学実習の初日オリエンテーションで映像を使用した演習を実施した。小児看護学演習後と小児看護学実習後のアンケート調査と、学生の実習での自己評価をもとに、実践に向けた効果的な演習方法を検討し、来年度の課題について示唆を得たため報告する。

II. 目的

小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習後と小児看護学実習後の学生へのアンケートから、実践に向けた効果的な演習方法の検討し、次年度の課題への示唆を得る。

III. 研究方法

1. 研究対象者

学士編入生を含む看護学部3年生のうち、小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習に参加した学生92名。また、小児看護学実習初日オリエンテーション

に参加した学生90名。

2. データ収集期間

2017年5月～2018年1月

3. 演習の方法

1) 小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習の内容

小児看護学Ⅱ第1回講義日に〔健康問題を抱える小児の療養環境〕講義を行い、小児の成長・発達、小児の事故の特徴についての文献や資料を提示し、事前に資料を読んでから演習に参加するように伝えた。

演習用の資料として、事故が起こす可能性の高いと考えられる3つの場面の映像を提示した。内容は臨床で遭遇しやすい場面として、場面①輸液ポンプのアラームが鳴った看護師がベッドサイドに行き子どもとかかわる(1分36秒)、場面②プレイルームで学童が2名で遊んでいる(1分)、場面③ベッドで親がオムツ交換をしている(23秒)とした。

92名の学生を1グループ4名の23グループに分け、5月19日は11グループ、26日は12グループをそれぞれ配置した。〔小児の安全な療養環境への支援〕演習を実施しないグループは〔小児に関する看護援助技術演習〕を実施し、翌週に交代する方法で演習を行った。各グループには3つの場面のうち1つの場面を提示し、割り当てられた1つの映像資料を用いて、事故につながると考えられる箇所の抽出とその理由、事故を予防するための計画立案について、グループディスカッションを行った。ディスカッション内容は指定の用紙に記載し、それをもとに全てのグループがディスカッション内容を発表した。最後に全体で小児の療養環境への支援についてディスカッションを行った。

2) 小児看護学実習初日の実習オリエンテーション〔小児の安全な療養環境への支援〕の内容

小児看護学実習の初日オリエンテーションにて、グループ毎にDVD『子どもの安全を守る看護』を閲覧した。DVDの収録時間は19分で、内容は子どもの特徴、病室・ベッド内・廊下・プレイルーム・食堂といった場所での安全、ケア実施時の安全についてである。DVDには途中で『危険だと思うところはどこでしょう』という質問が入っているため、質問の箇所映像をとめ、2人1組になって5分間ディスカッションをしてもらい、質問の答えを発表してもらった。DVDの映像をすべて閲覧したあと、全体で病棟での小児の安全への支援についてディスカッションを実施した。

4. データ収集方法

1) アンケートの内容

アンケートは学内ネットワークのグーグルフォームにて作成した。小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習後のアンケートは、演習での学び、映像資料の感想、演習実施後の感想を質問した。小児看護学実習後のアンケートは〈病棟実習で受け持ち患者に対して安全な療養環境を整えることができたか〉〈小児看護学Ⅱ演習や小児看護学実習初日オリエンテーションでの学習は役に立ったか〉について、《とてもよくできた》から《全くできなかった》の5段階評価と、〔小児の安全な療養環境への支援〕の演習について、全体の感想を質問した。

2) アンケートの実施

小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習終了後と、小児看護学実習最終日にグループ毎に実施する実習振り返りのカンファレンス終了後に、参加した学生全員に説明書を配布し、アンケート実施について説明した。その後メールにてアンケートを配信した。

3) 小児看護学実習後の学生の自己評価

小児看護実習は保育園、重症心身障害児施設、小児病棟の3ヶ所で実施している。小児看護学実習後の学生の自己評価として実習場所ごとの実習目標到達度として、《とてもよくできた》から《全くできなかった》の5段階評価を行ってもらっている。実習場所ごとの自己評価表のうち、小児の安全な環境への配慮や看護実践に関する項目だけを収集した。

5. データ分析方法

小児看護学Ⅱ演習後の回答については学生の学びと演習の改善点の2点に着目し類似した内容をまとめた。小児看護学実習後は、病棟実習での活用と改善点、小児看護学Ⅱ演習と小児看護学実習オリエンテーションを通して全体の感想について内容をまとめた。また小児看護学実習後の学生の自己評価については、実習目標到達度を集計した。

6. 倫理的配慮

アンケート実施の目的、方法、アンケートの回答は自由意思であること、回答しなくても学生個人の評価や学業上の不利益を被ることはないこと、などについて記載された説明書を作成し、小児看護学Ⅱ演習後と小児看護学実習後に出席した学生全員に配布し、説明を行った。グーグルフォームでのアンケート実施については、送信した回答はすべて暗号化されるため外部への漏洩を防ぐことができること、回答を送信してもメールアドレス等個人情報は記録されないことを説明した。研究参加の同意については、アンケートの返信をもって研究参加の同意と、紀要投稿に関する同意を得たこととした。本研究

表1 アンケート回収率

	アンケート配布数	アンケート返信数	%
小児看護学Ⅱ演習後	92	17	18.5
小児看護学実習後	90	37	41.1

は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：17-A009）。

IV. 結果

小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習後の返信数は17（回収率18.5%）、小児看護学実習後の返信数は37（回収率41.1%）であった（表1）。以下の表記として、【】はカテゴリ、「」は学生の記載内容として記述した。

1. 小児看護学Ⅱ〔小児の安全な療養環境への支援〕演習後の学び

小児看護学Ⅱ演習後の学びとして、【発達段階に合わせた危険を予測すること】【多くの視点があることの気づき】があった。

1) 【発達段階に合わせて危険を予測すること】

学生は小児の事故の特徴として「発達段階により事故の危険性が変化する」ことを理解し、「安全に対する意識を持つ視点をもつこと」を学んでいた。小児の事故では「疾患や治療によりさらに危険を予測できない状況になる」「心理面も影響する」といった事故の危険性は変化することを理解し、危険を予測することの必要性を学んでいた。危険を予測するには「疾患や治療など子どもの身体状態がわかっていないと予測できない」といった、疾患や治療の知識の必要性や観察力が求められることを学んでいた。

2) 【多くの視点があることの気づき】

学生は「他のグループ発表やディスカッションにより自分では気がつかなかった危険性に気がつく」ことができ、他の見方や考え方があることに気がついていた。また「同じ事例でも見方が異なっていた」ことにより、事故の危険性は複数存在することから「様々な見方をしなければならない」ことに気がつき、危険を予測するには、多角的な視点をもつことの必要性を学んでいた。

2. 演習の改善点

改善点として【映像資料に関すること】【グループディスカッションに関すること】【事前学習に関すること】があった。

1) 【映像資料に関すること】

「映像資料であったためイメージはつきやすい」が「輸

表2 アンケート結果
問1. 病棟実習で受け持ち患者に対して
安全な療養環境を整えることができたか

	人数	%
とてもよくできた	14	37.8
よくできた	14	37.8
できた	9	24.3
できなかった	0	0
全くできなかった	0	0
合計	37	100

表4 保育園実習自己評価
安全を守るための環境や支援を考えることができる

	人数	%
とてもよくできた	48	53.4
よくできた	39	43.3
できた	3	3.3
できなかった	0	0
全くできなかった	0	0
合計	90	100

液のルートが反射して見えにくい」といった、画質が悪いという意見があった。映像の時間については、「制限時間内で閲覧しディスカッションを行うにはちょうど良い長さだった」という意見もあれば、「映像資料③の時間が短いため物足りない」といった映像の時間に関する意見があった。「3事例ではなくもっと多くの場面があったらよかった」といった、多くの場面でのディスカッションを望む意見があった。

2) 【グループディスカッションに関すること】

ディスカッションのグループメンバー数に関しては、「4名のグループメンバーは話しやすくちょうどよい」「少人数で進めやすかった」といった、グループメンバー数は適当であったという意見があった。

ディスカッションの時間を30分で設定したが、「もう少し考える時間が欲しかった」という意見があった。演習では発表資料として、教育支援システム上に添付されたword形式の用紙にディスカッション内容を記載するよう指示したが、用紙への記載に時間がかかり、制限時間内に終わらなかったグループもあった。

3) 【事前学習に関すること】

事前学習として小児看護学Ⅱ第1回講義と資料を提示したが、学生からは「演習直前に小児の事故に関する講義があればもっと理解できた」という意見があった。

3. レベルⅡ小児看護学実習での活用

病棟実習で受け持ち患者に対して安全な療養環境を整えることができたかについては、「とてもよくできた」

表3 アンケート結果
問2. 小児看護学Ⅱでの演習, 小児看護学実習初日オリエン
テーションでの学習は受け持ち患者に対する安全な療養環境
への支援に役に立ったか

	人数	%
とても役立った	18	48.6
役立った	17	46.0
少し役立った	2	5.4
あまり役立たなかった	0	0
全く役立たなかった	0	0
合計	37	100

表5 重症児施設見学実習自己評価
安全・安楽を配慮して重症児に関わることができる

	人数	%
とてもよくできた	48	55.8
よくできた	29	33.7
できた	9	10.5
できなかった	0	0
全くできなかった	0	0
合計	86	100

見学実習休み：4名

《よくできた》と答えた学生は28名だった(表2)。

理由は「環境整備の計画への取り込めた」「受け持ち患者とともに実施できた」「安全な環境への意識をもって実習に臨んだ」であった。

演習や小児看護学実習初日オリエンテーションでの学習は役に立ったかについては、「とても役立った」「役立った」と答えた学生は35名だった(表3)。

理由は「小児の安全に関する特徴を思い出し、実習中に意識することができた」「実習でみるべきポイントをおさえることができた」「実習中にDVDと同じ状況があり、対処することができた」であった。

4. 小児看護学実習後の自己評価

保育園実習と重症心身障害児施設見学実習では、「とてもよくできた」「よくできた」と答えた学生が多かった。保育園実習では「保育士が子どもとかわる様子や、カンファレンスでの保育士からの意見から、子どもの安全への支援を考え実施することができた」という理由であった(表4)。

重症心身障害児施設見学実習では「実習指導者の見守りや援助のもとにオムツ交換や遊びを実施した」という理由であった。「できた」と答えた学生が9名おり、その理由として「保育士や実習指導者の援助があったからこそ安全に実施できたのであって、主体的に安全に配慮したとはいえない」であった(表5)。

表6 病棟実習自己評価
看護援助計画を安全に実施することができる

	人数	%
とてもよくできた	31	34.4
よくできた	41	45.6
できた	16	17.8
できなかった	2	2.2
全くできなかった	0	0
合計	90	100

病棟実習では《よくできた》と答えた学生が多く、次に《とてもよくできた》《できた》の順で答えていた(表6)。《できた》《できなかった》と答えた学生が18名おり、その理由として「受け持ち患者の機嫌や啼泣の有無と程度、治療の副作用の有無と強さだけでなく、その日その時の気分により動きが変わるので、危険を予測することが難しかった」であった。また「学童期・思春期の患者を受け持った場合、成人とは違うとわかっていてもどのように関わればよいのか悩んだ」「セルフケアへの支援として考えた場合、どこまで安全を配慮すべきか悩んだ」と答えた学生もいた。

5. 小児看護学Ⅱ演習と小児看護学実習オリエンテーションを通して全体の感想

全体の感想としては【様々な状況を想定した多くの場面設定の必要性】【実習初日の演習による安全な療養環境への支援の再確認】【演習方法の検討の必要性】があった。

1) 【様々な状況を想定した多くの場面設定の必要性】

臨地実習では多様な年齢の子どもがおり、様々な場面が想定される。そのため「パターンを色々変えるなど、様々な場面設定があったらよかった」「小児の性格をもう少し詳しく設定する、母親だけではなく他の家族員も登場させると実際に近くなる」といった場面設定への意見があった。また「学童期も危険なことはあるので、学童期以降の小児の安全について深く学びたかった」という意見もあった。

2) 【実習初日の演習による安全な療養環境への支援の再確認】

「5月の演習内容を忘れていた」「実習の初日オリエンテーションでDVDを視聴したことで、小児の安全に関する特徴を思い出した」といった、5月の演習での学びを思い起こすきっかけになっていた。また、「5月はほんやりとしたイメージで終わっていた」「安全な療養環境への支援の必要性を再確認できた」といった、小児の安全の特徴や療養環境への支援の必要性の理解の深まりや、支援の再確認になった学生がいた。

3) 【演習方法の検討の必要性】

小児看護学実習前のディスカッションでは実習グループ全員でのディスカッションであったため、「人数が多いと発言がしにくい」「演習のときのように少人数がいい」といった、ディスカッションを行う人数への意見があった。また「映像だけでなく実際に自分で動いてみるができるような演習にしてほしかった」といった、実技も希望する意見もあった。

V. 考察

1. 演習方法の検討

2016年度小児看護学演習〔小児の安全シミュレーション(グループワーク)〕では、①小児の特徴と事故との関連の理解の深まり、②安全な療養環境の支援に必要な能力(瞬時に危険性を判断する能力、事故の危険性を予測する能力)の気づき、③看護実践(発達段階に合わせた実践、全体像をとらえる、周囲の大人が環境を整える、小児自身に理解を促すこと)への気づきの3つのカテゴリーが抽出された⁴⁾。今回の学生の学びは【発達段階に合わせた危険を予測すること】【多くの視点があることの気づき】であり、2016年度とはほぼ同様の内容での学びがあった。ディスカッションで使用した資料を写真資料から映像資料に変更したが、学生の学びは大きく変わることはなかったと考える。

学生は他のグループの発表を聞き、自分では気がつかなかった箇所に気がつくことで、多角的な視点を持つ必要性を学んでいた。事故を起こす可能性について、グループメンバーのなかで自分の気づきと根拠を共有すること、次にグループ発表で他のグループの意見を聞くことで、学生は新たな点に気がついていたと考える。基礎看護教育の学習過程にある学生は、臨床での経験が少ないことから、疾患や治療の知識不足から臨床場面で収集できる情報量が少なく、収集した情報間の関係性を理解する力が弱い⁵⁾。学生1人では情報収集をする力やアセスメントの力が弱い、グループメンバーとのディスカッションや他のグループの発表内容を聞くことで、学生間で気づきを共有することになり、見落としした情報や不足した知識、看護援助計画への気づきにつながっていたのではないかと考える。学生間でのディスカッションは、学生が不足している情報やアセスメントを提供しあうことになり、学びが深まっていたと考える。

インシデント・アクシデント発生の主たる原因としてコミュニケーションエラーによる事故が多いと言われていいる。コミュニケーションエラーは、明らかに間違っ内容が伝達されたことだけではなく、言葉を省略したことにより相互の理解にずれが生じたことによるエラーも存在する⁶⁾。グループディスカッションにおいて、学生

は自分の意見を述べるだけでなく、グループメンバーの意見を理解しあいながら意見をまとめていた。相手に理解してもらうため自分の意見を省略せず、わかりやすい言葉で説明することは、コミュニケーションエラーを防ぐための大事な技術である。コミュニケーション力を習得し、さらに向上するためには、自分の意見を発言する機会をつくり、相手に自分の意見を理解してもらう経験を増やすことが必要である。今回の演習で実施したグループディスカッションは、コミュニケーション力をつけるためのよい機会になっていると考える。学生にとっては大人数のなかで自分の意見を発言することに抵抗がある場合は、少人数のグループをつくり、自分の意見を発言しやすい環境を整えることが必要であろう。安心できる環境で自分の考えをわかりやすい言葉で発言する経験を増やすことは、コミュニケーション力の向上につながると考える。

2. 小児看護学実習への応用

初日オリエンテーションでの演習は、小児看護学Ⅱ演習での学びを思い出していたこと、実習における療養環境の支援を再び学習することで、実習において患者の療養環境を意識して観察し、安全な環境への支援を考えることにつながっていたと考える。学生が自ら危険に気がつき、考える力は、状況に応じた判断力・実践力に結び付き、医療安全に必要な実践能力を向上させる⁷⁾。今回実施した演習は、臨床場面での療養環境への支援を意識づけさせる効果はあったと考える。さらに実践能力を向上させるためには、現在の場面を切り取った映像を閲覧しディスカッションするだけではなく、その場で判断し実践できるようなシミュレーション教育を取り入れる必要があるだろう。事例については事故が起こりやすい乳幼児期だけでなく、学童期・思春期の事例や、面会に来た家族も含めた事例など、多様な年齢や場面に対応できるように工夫する必要がある。

学生の自己評価の結果から、学生は実際の安全への支援に難しさを感じていることがうかがえる。看護師は今までの経験をいかして直観を働かせ、これから起こりうることを予測し、危険を回避するための方法を選択し支援している。そのような一連の流れを、臨床での経験が少なく、基礎的な知識と患者の状況を結び付けることに時間を要する学生が実践するには、患者への理解を深め

ることと、不足している情報を提示して学生の気づきを促すような支援が必要である。そのため臨地実習では、実習指導者や教員が安全に関する患者との関わりの中で、学生が気づいたことと考えたことを聞き、意見を共有し、学生とともに状況のアセスメントを実施することが必要である。それにより不足している学生の力が補足され、学生の観察力や判断力、実践力が向上することが期待される。臨地実習での実習指導者や臨床の看護師の協力が不可欠と考える。

本研究は学生へのアンケートと、学生が記載した自己評価を使用して分析を行っており、教員による小児看護学実習での学生の実践評価に関してはデータとして入っていない。今後の課題として、小児看護学実習での学生の実践の状況を客観的に評価し、学生の自己評価と合わせて、学生の学びや課題を分析し、方法の検討を行う必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学部生の皆様にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 日本医療機能評価機構. 医療情報収集等事業 平成28年度年報 [Internet]. <http://www.medsafe.jp/contents/report/index.html> [参照 2018-08-27]
- 2) 西海真理. 医療安全対策：添田啓子, 鈴木千衣, 三宅玉恵ほか. 看護実践のための根拠がわかる小児看護技術. 東京：メヂカルフレンド社；2016. p. 41-2.
- 3) 山元恵子. 安全：山元恵子編. 写真でわかる小児看護技術－小児看護に必要な臨床技術を中心に－. 東京：インターメディカ；2017. p. 94-6.
- 4) 沢口恵, 小口祐子, 小野智美ほか. 小児の療養環境に関する患者安全教育の試み. 聖路加国際大学紀要. 2017；3：117-22.
- 5) 藤内美保, 宮腰由紀子. 看護師の臨床判断に関する文献的研究－臨床判断の要素および熟練度の特徴－. 日本職業・災害医学会会誌. 2005；53(4)：213-9.
- 6) 石川雅彦. どのように医療安全を学ばせるか. 看護教育. 2009；50(1)：78-83.
- 7) 石川雅彦. 今, 求められている医療安全教育. 看護教育. 2008；49(10)：854-9.